

鎌倉・逗子沿岸の干潟に産する多毛類（環形動物門）

西 栄二郎

Eijiroh Nishi:

Polychaetous Annelids from Sandy Tidal Flat of Kamakura and Zushi, Sagami Bay

要旨

2002年から2003年にかけて、鎌倉材木座海岸から逗子の干潟に産する多毛類（環形動物門）の調査を行った。計19科32属36種が見いだされた。両海岸の砂質底には、スゴカイイソメとイソタマシキゴカイがもっとも多く、ついでスピオ科の多毛類が多く見いだされた。近年希な種となりつつあるツバサゴカイも両海岸に見いだされた。田越川河口の干潟域に汽水域特有の種が出現した。

相模湾東岸の江ノ島から三浦半島にかけては、多くの生物相調査が行われている（例えば工藤, 1999; 植田ほか, 2003）。多毛類についても小田和湾を中心に様々な報告がなされている（例えば西・工藤, 2003; 今島, 1968; 大和田, 1988）。しかし、鎌倉や逗子の砂浜海岸においては、これまで多毛類についてのまとまった報告はない。そこで、今回、鎌倉材木座海岸から逗子湾において、調査を行ったので、ここにその成果を報告する。

採集地と方法

調査地は、鎌倉材木座海岸から南下し、逗子湾の田越川河口、渚橋付近の潮間帯干潟においてである。2002年3月12日、6月17日、2003年5月15日、6月1日、6月30日に、潮間帯の砂浜域と河口部の泥底干潟において、徒歩による調査を行った。目視観察による調査と、大型種の採集、また個体密度の高い場所においては、50センチ四方の方形枠内の泥を0.5ミリの篩でふるって、その中の出現種を採集する方法を採用した。材木座海岸の北東岸においては、方形枠内の優占種の個体数も算出した。

標本は10%海水ホルマリンで固定し、70%エタノールで保存した。今回報告する多毛類の標本は、すべて千葉県立中央博物館海の博物館に登録・保管してある（CMNH-ZW01529, -01631-1645）。

結果と考察（表1）

計19科32属36種が採集された。もっとも種数が多いのは、材木座海岸の北東岸と田越川河口（渚橋の下から上流側）であった（表1）。

材木座海岸東岸（豆腐川の東南側）では、砂浜干潟とれき底が混在し、かつ転石もあることから、それぞれの生息場所に出現する種類が混在して、出現種数が多くなったと考えられる。その場所では、イソタマシキゴカイとドロオニスピオが優占し、2003年5月15日、6月30日における密度は、前者は120-1000個体以上/m²（N=4）、後者は90-340個体/m²（N=4）であった。また、その場所においては、ツバサゴカイの分布も確認された。

材木座海岸の岸よりの砂浜（前浜）干潟においては、スゴカイイソメとイソタマシキゴカイが優先していた。

汽水域を含む田越川河口の泥底では、カワゴカイやアシナガゴカイ、コケゴカイなどのゴカイ科が多く見いだされた。

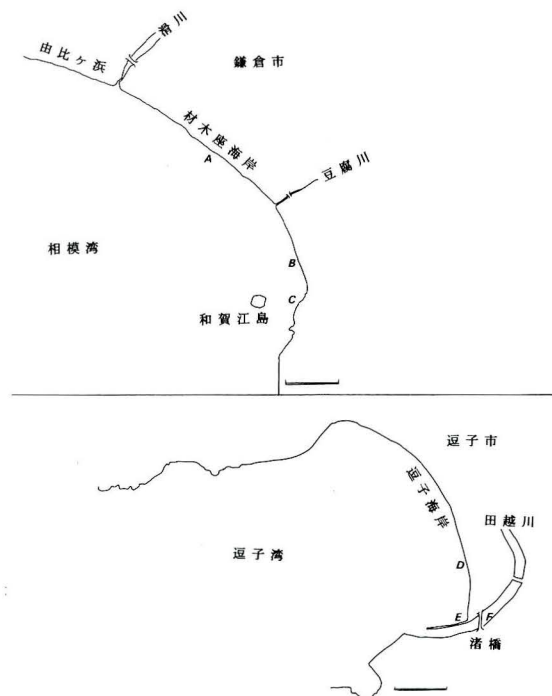


図1. 調査地。A-Fは調査地点を示す。スケールは200m。
スケールは200m。

表1. 鎌倉・逗子近海に産する多毛類。地点A-Eは図1参照。

出現種	A	B	C	D	E	F
ホソミサシバ <i>Eteone</i> cf. <i>longa</i> (Fabricius, 1780)			+			
コケゴカイ <i>Ceratonereis erythraeensis</i> Fauvel, 1918						+
ヤマトカワゴカイ <i>Hediste</i> cf. <i>diadroma</i> Sato & Nakashima, 2003						+
アシナガゴカイ <i>Neanthes succinea</i> (Frey et Leuckart, 1847)						+
オウギゴカイ <i>Nectoneanthes latipoda</i> Palk, 1973					+	
イシイソゴカイ <i>Perinereis nuntia vallata</i> (Grube, 1857)						+
コアシギボシイソメ <i>Scoletoma nipponica</i> Imajima et Higuchi, 1975						+
スゴカイイソメ <i>Diopatra sugokai</i> Izuka, 1907	+	+	+	+	+	+
ヤチウロコムシ <i>Lepidonotus elongatus</i> Marenzeller, 1902						+
ヤスリウロコムシ <i>Harmothoe praeclara</i> (Haswell, 1883)			+			
コクチョウシロガネゴカイ <i>Nephtys californiensis</i> Hartman, 1938	+		+			
ミナミシロガネゴカイ <i>Nephtys</i> cf. <i>polybranchia</i> Southern, 1921			+			
ヤマトスピオ <i>Prionospio</i> (<i>Minuspio</i>) <i>japonica</i> Okuda, 1935						+
イトエラスピオ <i>Prionospio</i> (<i>Minuspio</i>) <i>pulchra</i> Imajima, 1990						+
エラナスピオ <i>Spiophanes bombyx</i> (Claparede, 1870)						+
エラスピオ sp. <i>Scolecopsis</i> sp.			+			
ドロオニスピオ <i>Pseudopolydora</i> cf. <i>kempii</i> (Southern, 1921)			+			
オニスピオ <i>Pseudopolydora antennata</i> (Claparede, 1870)					+	
ツバサゴカイ <i>Chaetopterus cautus</i> Marenzeller, 1879			+		+	
ツツオフェリア <i>Armandia amakusaensis</i> Saito, Tamaki & Imajima, 2000			+			
シダレイトゴカイ <i>Notomastus</i> cf. <i>latricens</i> Sars, 1851			+			+
イトゴカイ科の1種 <i>Heteromastus</i> cf. <i>filiformis</i> (Claparede, 1864)			+			
イトゴカイ <i>Capitella</i> cf. <i>capitata</i> species complex						+
イソタマシキゴカイ <i>Abarenicola pacifica</i> Healy and Wells, 1959	+	+	+	+	+	+
チマキゴカイ <i>Owenia fusiformis</i> delle Chiaje, 1841			+			
ウミイサゴムシ <i>Lagis bocki</i> (Hessle, 1917)			+			
クシカギゴカイ <i>Sigambra phuketensis</i> Licher & Westhelde, 1997						+
チロリ <i>Glycera nlobarica</i> Grube, 1868			+			
チロリ属の1種 <i>Glycera macintoshii</i> Grube, 1877			+			
ミズヒキゴカイ <i>Cirriiformia</i> cf. <i>comosa</i> Marenzeller, 1979			+			+
ニッポンフサゴカイ <i>Thelepus</i> cf. <i>setosus</i> (Quatrefages, 1866)			+			
ケヤリムシ科の1種 <i>Sabellaster</i> sp.			+			
エゾカサネカンザシゴカイ <i>Hydroides ezoensis</i> Okuda, 1934			+			+
ヤッコカンザシ <i>Pomatoleios kraussii</i> Baird, 1865			+			+
サキブトカンザシゴカイ <i>Salmacina dysteri</i> (Huxley, 1855)			+			
ウズマキゴカイ科の1種 <i>Neodexiospira brasiliensis</i> (Grube, 1872)			+			+

出現種の中で最も広い範囲に見いだされたのはスゴカイイソメとイソタマシキゴカイであった(表2)。共に砂浜域に広く見いだされ、密度は最大で5-10個体/m²であった。逗子海岸では、スゴカイイソメは釣り餌として、捕獲されており、2002年4月から7月の調査においては、干潮時に10-32個体/時間/人であった(N=12人翌のべ数)。その際の捕獲成功率は、1-1.35/3回であった(N=152)。概算すると、波打ち際での成功率が岸よりよりも高く、干出した棲管内では、管の奥深くにいて、水没している棲管内では、管の上部に定位していることが予想される。これらのスゴカイイソメの採捕確率は、堀子と呼ばれる人の経験によるものと推測される。

ツバサゴカイの棲管は田越川河口から逗子湾に注ぐ、干潟の縁部にも見いだされた。材木座海岸での分布域は、海水浴客のほとんどこない場所(東南側は、ボートやウインドサーフィン用とされている)であり、逗子海岸でも、海水浴客の分布の縁部にあたる場所であった。横浜野島近海でも、ツバサゴカイの分布域は潮干狩り場の縁部であり、潮干狩り場内では、頻繁に底質の砂泥が攪拌され、また、底質が踏み荒らされるので、終生U字状の棲管内に棲むツバサゴカイは、人の出入りの激しい場所の外側に追いやられたと思われる(西ほか, 2004)。

今回、砂浜干潟や河口域の多毛類を総合的に調査し、東京湾三番瀬や多摩川河口、横浜野島海岸など、他の海域と比較しても遜色ない多様性を保持してい

ることが確認された(例えば西ほか, 2004)。近海の江ノ島周辺や小田和湾との共通種も多く見つかった。観光地として知られる鎌倉や逗子の砂浜域に、多様な生物相が確認されたが、一方で、大型のツバサゴカイなどが生息域を狭めている可能性も指摘された。今回調査した両海岸では、海水浴やサーフィン、ボートなど、遊具の種類によって、利用する海域を分けているが、そのような海岸の利用方法によって、底生生物への影響が生じるのかどうか、今後の課題として重要であると思われる。

謝辞

本研究の一部は(財)神奈川科学技術アカデミーからの助成を受けて行われた。ここに記して深謝したい。

参考文献

- 今島 実, 1968. 葉山地方の多毛環虫類. 横須賀市博物館研究報告, 14: 20-41.
- 工藤孝浩, 1999. 三浦半島, 小田和湾における海草群落の分布. 神奈川水産総合研究所研究報告, 4: 51-60.
- 西 栄二郎・工藤孝浩, 2003. 三浦半島小田和湾の海草藻場における多毛類相. 神奈川水産総合研究所研究報告, 8: 57-69.
- 西 栄二郎・工藤孝浩・萩原清司, 2004. 野島海岸と野島水路, 平潟湾に産する多毛類(環形動物門). 神奈川自然誌資料, (25): 51-54.
- 大和田 隆, 1988. 油壺湾の多毛類相. 神奈川自然史資料, (9): 31-36.
- 植田育男・萩原清司・崎山直夫・足立文, 2003. 江ノ島の潮間帯動物相 IV. 神奈川自然誌資料, (24): 25-32.